D 24　家政学分野における住居管理論（第1報）　明治～第2次大戦について

目白学園女短大　中島明子

目的　明治から第2次大戦までのいわゆる住宅政策が未成熟の時期における住宅の維持管理がどのように行なわれていたかをつかむために、この時代の家政論の中での住居管理の内容とその特徴を明らかにする。

方法　明治から第2次大戦までに書かれた家政書における住居分野を検討した。

結果　明治初期から中期にかけての翻訳的家政書においては、欧米の住宅事情と公衆衛生の発達の成果を反映して、住居衛生が重視され、全体の記述の中でも住居分野が大きな位置を占めるのが特徴であるが、そこでは住居の維持保全についての意識は薄く、衛生を除くと新築購入、装飾が中心であった。明治末期より「掃除」がみられるが、本格的に住居の保全管理が論ぜられたのは大江スミによってである。新築購入の他に借家住いをも視野に入れ、合わせて修理、保存、掃除手入を取り上げた。その後の時期には常見育男分類の「伝統的家政書」にみられる修身育家的色合いで掃除等が取り扱かわれる傾向があったが、大江の段階では実用知識に徹していた。大正期に入ると大正デモクラシーや農民運動を背景にして、生活問題を意識した家政書が現われる。一つは片岡重助による『田園家政学研究』で、片岡は従来の家政書における住居の記述は、新築を仮定しているものが多かったが、住宅論は「現状の改善論を主体として進めなければならぬ」として、住居論＝住居管理論といった構想を示した。同時期に森本厚吉は我国の住宅問題を指摘し改善と提案を行なった。昭和に入ると井上秀により住居費の分析が行なわれ、個別家計における住居費と我国の実態が取り上げられたことは画期的であった。